

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1365号 令和元年12月15日

12月号

新しき御代の東亜志士たらむ ……………大日本生産党 諮問委員 有馬 樸……	1
中国でペスト大発生の何故!?! ……………	3
アメリカが韓国に求めた駐留費増額の根拠 ……………	4
あいちトリエンナーレ「表現の不自由展」の罨 ……………	5
鈴木宗男議員の国会質問の重大さ ……………	5
韓国の反日を諷める「反日種族主義」という書籍 ……………	6
寄稿 猪が東京にまで出現 ……………「兵庫通信」代表 村上 学……	6
“最後の安全保障、種子条例制定を急げ” ……………	7
本部・地方本部活動報告 ……………	7

本社 〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷2-5-24-103
電話・FAX (03)5313-0215
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

発行所
中央情報通信社
主幹・編集長/谷田 透

新しき御代の東亞志士たらむ

大日本生産党 諮問委員 有馬 樸

一、

畏くも 聖上に於かせられては先づ頃、即位の御大礼そして大嘗祭を執り行はれたまふた。御讓位そして今上御踐祚より此の間、吾人達草莽の臣民は、只管、諸儀の恙無く修せらるるを祈り奉り、そして御儀の麗しく厳しくある様を遙かに仰ぎ見つつ、皇国の蒼生と生まれある有難さと重みに、深い感激を覚えたとてであつた。

皇国一世一代の重儀の旬日後、世界最大十三億人の宗教団体の長にして世界最小主権国家の元首たる、ヴァティカンのフランシスコ教皇が来日した。教皇からは教説以外にも、平和、非核化や環境、多様性、また日本の青年向けの言葉もあつた。その教皇の言葉のひとつ「日本は難民を受け入れるべき」に、最近「保守」方面で売出し中の或る若手「国際政治学者」が反発し、「教皇はどんな立場で内政干渉染みた事をいふのか」「基督教徒でない自分は彼を全然尊敬しない」「ヴァティカンで受け入れてみる」「共産中国向けに発言せよ」等と熱くなつてゐるのを見て、失笑してしまつた。

難民や原子力云々、反論したいのは分かつた。しかし「どんな立場で」やら「内政干渉」やら、此の自称学者先生、もしや国際次元でも政教分離を原則と信じてゐるのか。まさか、国際政治への教皇庁の影響力に関する知識が高校世界史程度で、十字軍からデマルカシオン辺りで終はつてゐるのか。組織内の倫理的頹廢が表面化するも尚、現在もヴァティカンの政治・思想的発信力は、その情報網と共に、陰に陽に全世界に影響してゐる。尊敬しようがしまいが、この影響力とその構成への目配り無しに国際政治分析などあり得まい。ヴァティカンと北京の接触についても、直接関係するシナの教会組織問題のみならず、香港やチベット、ウイグルの人権問題も含む水面下での影響にも、考察は不可欠だ。



そもそも、宗教を考慮せずとも国際事情を語る商売が成立する、現代日本の世界認識や知的水準を憂ふべきか。韓国や北朝鮮の暴論横暴に対するに、緻密に情報分析し整然と反論するでも政治勝利を目指すでもなく、只奴らは嫌ひだ絶交だと喚く幼稚な連中すら、目立ちさへすれば愛国活動を名乗られて本が書け、支持者が集まる時代である。侵略責任追及だのアジアへの反省だの叫んでをれば正義平和に酔ひ痴れ得た、往年のお手軽左派勢力が弱体化した分、逆にかかるお気軽右派が増加し、それを相手にする売文も商売として成り立つのか。嘆かほしき事態である。SNSが既存メディアを相対化し、誰もが簡単に発信者になり得る時代で有らばこそ、根基揺るぎなき思想と運動の覚悟、即ち志士たるの覚悟が此れ迄以上に重要であると思ふ。

二、

振り返つて此度、吾人達が九重の奥に仰ぎ見たものは何であつたか。御大礼を「古式ゆかしく」「平安絵巻さながら」等評した報道も一部あつた。言ひたい事は判らぬでもないが、何とも言葉の軽い不見識、観光地の時代行列扱ひではないか。確かに全世界の賓客の目にも、日々俗事に忙しい現代日本人の目にも、御儀は色鮮やかに映つた事ではあらうが、それは現象に過ぎぬ。崇高なる本質は、古式云々よりも深奥に坐します。

そもそも奈良朝以降長らく、即位礼で上御一人は唐風の天子御礼服、袞衣(こんい)と冕冠(べんかん)を服しあそばされた。かかるシナ式を廃し、禁色の御袍と立纏の冠をお召しになる即位礼は、全地球的IIグローバル世界の中の「日本」を明確に意識された明治維新この方(実に明治帝即位御大礼には「地球儀」も弁備された)の例である。平成の御代替りの際此の事を以て「現在の皇室儀礼は、実は本物の伝統文化ではなく新例だ」等と得意げ

に語る左翼「歴史学者」もあつたが、全く本義を弁へぬ愚か者の言である。かくも恥かしい輩は流石に絶滅したか、此度は殆どこの種の言を見ない。

有職故実の重要な事は論を俟たぬ。だが君臣の絆違はぬ微の明らかにあらば、現象を超えて吾人達が仰ぐ真姿は、皇朝御歴代の御服御装飾御作法の如何に現れさせ給ふとも、同一で有ると信ずる。即ち『日本書紀』が記す、真床追衾に覆はれ高皇産靈尊により高千穂峰に降され坐した瓊瓊杵尊の、また東征の後「苟も民に利有らば、何にぞ聖造に妨はむ」と、国の奥区(もなか)たる檀原の地に皇都を造営された神武天皇の、そして雄々しくまた優美なる御歴代の御姿に重ねられる「現御神と大八嶋国知ろしめすすめらみこと」の御真姿に他ならぬ。これぞ本義だ。

即位御宣明に続き、受讓の「踐祚の大嘗は、七月以前に位に即きたまはば当年事を行へ」と平安期『延喜式』に定あるまま、此度の大嘗祭は踐祚当年の(太陽曆乍ら)十一月、中の卯の日に夜を徹して、聖上親しく齋行せられた。秘儀中の秘儀たる大嘗祭の神秘には諸解釈あるが、只揺るぎなき事は、現御神が御自ら国家国民の安寧を祈る、真に神による神祀りたる皇室祭祀の中でも大嘗祭は最大の重儀であり、祭政一致の本義の極みたる事実だ。



「大嘗会御神殿絵図(部分)」(國學院大學博物館所蔵)

すべく、その政教分離を争闘の武器にすると、一体此の連中は何がしたいのか。

ましてや、祭政一致と政教分離は両立する。明治期以降、基督教ほか宗教関係の翻訳邦語に皆「教」の文字があるのは、近代化に当たり祭政一致国家が宗教的实践に、「祭」とは別に何を求めたかを如実に表す。だが上述の運動家連中の目には、諸国家の世界戦争に吾が祭政一致の日本も参入した歴史が、因果が転倒し、日本は祭政一致の著き故に戦争を行つた、と見えるらしい。何とも、哀れなほどの自意識過剰とも映る。繰り返すがかつて此の類の連中は「アジアに対する反省」を叫んでゐた。しかし此度の御大礼には、そのアジアは無論、諸国諸域から実に多くの代表や要人が参列、吾が大君の御即位を奉祝したのである。かの運動家連中の描く「アジア」は何処にあつたのか。反省不要といふのではない。結局奴等は自己満足の為に、反省を掲げた御高説を自分以外の日本人にお説教したに過ぎず、現実のアジア

諸国の政治関係など、背景の書割り程の意味すらなかつたのだ。そのアジアを含め世界中から、今や毎年三千万の観光客が日本を訪れてゐる。観光文化の点では、今や日本各地も「大東亜共栄圏」の要なのかも知れぬ。

他方でこの半世紀ほどずっと、日本人一人当たりの労働生産性効率は、先進国中最低水準である。この効率で経済大国の位置を維持してきた事こそ、祭政一致を根基とする神州の民の、欧米とは異質な国民的団結が生む底力だつたかも知れぬ。だが最早、かかる集団意識を以てしても力及ばぬ状況である。少子高齢化は見えて見ぬ振りの許されない、面前の難問だ。対応として政権と財界は、呼称を貼り換へて迄も労働移民の大量受入れを模索し続けるが、何処までが本当に己むを得ぬ事なのか。まづは日本人自身の労働力と生産性の倫理社会的関係に革新的な突破口を見いだす事こそが、亡国を避ける為喫緊の課題である。

四、

欲望が果て無く国境を越えてゆくグローバ

平成の御代替りの際、大嘗祭は政教分離違反だのと喚く輩から、民草の社に火を放つ賊徒まで、醜き奴共が跋扈した。だが当然ながら、民心一般は彼奴らより遠く離れ、報道なくば今や誰も気づかぬ程に衰微してゐる。此度も基督教徒等の一部運動家が政教分離違反を呼号した様だが、此の連中は一度でも、政教関係の歴史を真剣に考へたことがあるのか。今日の政教分離は、欧州中世末の血生臭い宗教戦争の結果生まれた、国家秩序を乱さず争ひを避けるための約束事であり、世界全人類に無条件に適用される普遍の真理でも何でもない。吾が国建国以来の秩序たる祭政一致を乱

ル資本主義は、世界規模で貧富の差を拡大させ、人心と自然を疲弊させ、人の移住は激流となり土着民の団結と生活環境を破壊する。自身も南米移民家系出身の教皇の、難民や文化多様性に関する発言の背後には、労働移民そして近年の地中海難民が呼び起こした多文化社会の蹉跌が、周知の通り欧州政治の根底を揺るがせつつある現実への危機意識もあるのだらう。宗教指導者の信仰的人間像は、同時代世俗社会の鏡像でもある。子供染みた反発を示してゐる暇などない。吾人達としては国事に向け思慮と分析の時である。

東亜は既に大乱前夜なのだ。米中貿易抗争波高し。ウイグル人強制収容所の実情を明かす文書が暴露され、香港情勢は深刻化の一途。韓国ポピュリスト政権は地政学的な海洋勢力陣営より大陸勢力への鞍替へ志向（此がG S O M I A 問題の本質だが、同時期の中韓軍事協力合意は日本ではほぼ注目されない）を鮮明にし、北朝鮮は瀬戸際外交の本格再始動中だ。空騒ぎしか能の無い野党は問題外だが、長期化に驕り花見に現を抜かし、露西亜に鼻であしらはれ、米国の商人大統領にすり寄るばかりの日本の現政権では、この大乱への備へは甚だ心許ない。領土不法占拠と同胞誘拐を既成事実化される程の弱腰体制で、仮に日本近海にボートピープルが大量に現れた時、まさか朝鮮戦争時の如く密入国を許すとしても、逆に全部撃沈するともいふのか。沖縄や離

中国でペスト大発生の何故!?

十一月二十日頃から顕著になってきたが、北京市が国内にペスト患者が発生したことを公表し始めた。甘肅省や内蒙古では、遊牧民地区を中心にペストが爆発的に拡大中だと言われている。この辺りは野生の野兎や野鼠を食べる風習がある地域だが、それとペストが大発生することとは結びつかないようだ。

ある情報によれば、既に当該地区では三〇〇の村が封鎖されており、ペスト症状が出た者は隔離され、治療をされずにデータを取られているという。

北京には解放軍の生物研究所という「生物兵器ラボ」が存在しており、そこから開発中の新

島の安全は保たれてゐるのか。

少なくとも、欧州や諸国の事例を他山の石とし、吾国の難民対策総点検を訴へる必要があらう。吾等は、諸国の倫理や工夫に学びつつも吾国民の良風に基を置き、一国平和主義の戦後復興の延長でも、新自由主義グローバルイズムの延長でもない、西洋近代の価値を根本的に転換する処を、アジアの東より探求せねばならぬ。

「迷惑だ。」大嘗祭批判の声明に参加したカトリック聖職者は、此度の教皇の皇居訪問と会見について質問され、かく答へたさうである。何ともはや。世が世なら、教会よりは即時に破門であらう。けれども、聖職と呼ぶも憚る斯かる独善偏狭の輩の上にすら、国泰かれ民安かれとの、吾が大君の天神地祇への祈りは及んでゐるのだ。何と皇恩の深き事よ。

個人の自由やら平等やらの約束事の基盤たる「吾ら」との共同意識は、約束事自体からは生まれず、人々の「まつろひ」情念的なむすびから生み出される。その儀礼的確認と顕在化こそが祭政一致、吾が日本の基盤である。弥高き皇謨かな。みたまわれ、東亜と世界に報効の証を立つる志士たらむとぞ、開けゆく令和の新しき御代に誓ひ奉る。

御氏吾 生ける驗あり 天地の

栄ゆる時に 相へらく念へば

(『万葉集』巻六)

型ペスト菌が漏洩したとか盗まれたなどとネット上で流布しているが、現実には漢民族以外の遺伝子を持つ特定民族に蔓延するよう改造した「生物兵器」を、遊牧民民族地帯で拡散させてデータを集め、その実証実験データを基にして再改造したペスト菌を香港と台湾で使うのではないかと憶測する声もある。

遊牧民地帯と黒竜江省の一部では、村の幹線道路の入口や空港のゲートに検疫所が設置され(写真)、厳重な取り締まりが始まっている。内蒙古では、学校も全て休校になっている。

台湾では、国民党が中共の資金援助を受けて巻き返しに躍起だったが、中共から国民党に送

り込まれていたスパイがオーストラリアに政治亡命を申請したことから、そのスパイが亡命の本土産に「台湾国民党買収リスト」を提出。そこに国民党の幹部や総統選挙候補者までが出ていたので、もう国民党が崩壊するのは決定的で、民進党は笑いが止まらない状況になった。

さてそうなると、我慢できないのは中共指導部で、台湾がアメリカの保護下で独立運動を叫ぶことは何が何でも潰したい。来年一月の台湾総統選挙、そして東京オリンピックには「チャイニーズタイペイ」ではなく「タイワン」で登録するようにOCC、IOCCに働きかけている問題を、中共では「共産党存亡の危機」と捉えている。もはや一刻の猶予も無い。

そこへ香港問題の長期化で、国際金融センター機能は香港からシンガポールに移転が決められ、中共がこれまで莫大な国家予算を投じて促成した広東や珠海などの都市には来てくれな



いことが確定した。香港は高層ビル群だけが無惨に残る「中国の田舎町」に落ちぶれる気配が濃厚になってきた。

香港のデモ隊が、アメリカ議会が制定した「香港人権法」を歓迎する意味で星条旗を振り回してデモを続けて居り、中共は挑発に乗せられて暴力を用いても弾圧しなればメンツが丸潰れになる。中共からメンツと恐怖を取り除いたら、残るのは腐った官僚支配だけだ。

香港七五〇万市民の半数は中国の国籍ではない。それなら中共指導部の過激なリーダーが「改造した生物兵器」を四週間だけ拡散して、すぐに殺菌滅菌することを考えなくても不思議はない。

今回の甘肅省、内蒙古、黒竜江省などの一部の遊牧地帯の村で実証実験されている気配のペストは、もしかすると驚くべき計画の準備段階なのかも知れない。

アメリカが韓国に求めた駐留費増額の根拠

トランプ大統領は日本と韓国に対して、米軍駐留費の増額を求めている。「お前らが自国でこれだけの防衛力を賄うのなら、この五十倍の費用がかかるぞ」と、物理的には当たり前前計算式を出していると言われている。

喩えてみれば、米軍という強力な番犬を飼っているのだから「餌代」が必要なのは道理である。番犬が他所で勝手に餌を食べてきて、寝床だけを我が家に置いているというのはどう考えても理屈に合わない。番犬が要らないのなら、我が家をアルソックにでも任せられる体制を作って、首輪を外してやるべきだ。



国にとっては十二分に支払えることは明らかである。

しかも、韓国駐留の海兵隊の一部は台湾へ移転させるので、実質的には在韓米軍は利益を生む計算になっている。

在韓米軍の戦略空軍は縮小などあり得ず、北朝鮮、中国東北部、ロシア極東沿海州を睨んだ拠点なのである。近々、フィリピンのクラーク基地やスービック基地を復活させるような世論も巻き起こるだろうと想定し、米軍の軸足はアジアに置いておくつもりだ。

トランプはまた日本政府にも在日米軍駐留費の増額を要求しているが、これも日本企業が法人税減額を利用して溜め込んだ内部留保を吐き出させれば、法人税として国庫に入ってくる金の一部に過ぎないと計算している。

アジアの情勢をもう少し緊迫させないと、日本も韓国もフィリピンも本気にならないので、新年からも冷戦の猿芝居は続けられることになろう。しかし、芝居から本気の喧嘩に発展する危険性は心得ておかないと、我々が損をすることになるのは言うまでもない。

トランプは現実主義者であり、理想や荒唐無稽な話はしない。米軍駐留費の増額に関しても、韓国が現在の文政権になってからの「左翼団体への不必要な補助金」の合計額が日本円にして約五千億円であると分析し、その上で「文政権は来年には倒れる」と判断した上で、在韓米軍駐留費を文政権が無駄遣いした補助金額と同額に設定して要求するという作戦に出ているのである。現状は約一千億円なので大きな金額に見えるが、韓

あいちトリエンナーレ「表現の不自由展」の畏

昭和天皇を戦犯だと言って写真を踏みつけたり燃やしたり、慰安婦少女像という名の銅像を並べたり、左翼反日主義者の溜飲を下げることをだけを目的としたような「表現の不自由展」だったが、これを何とかして公共施設で開催すること、なぜ実行委員会がそこまで固執したか：その理由が判明した。

この「表現の不自由展」は、あいちトリエンナーレの企画展として、芸術祭実行委員会会長の**大村秀章**愛知県知事（写真左）と企画展実行委員会が「契約」した条件で運営されるものであり、実行委員会芸術監督の**津田大介**（写真右）が選んだものが無条件で企画展の作品として飾られることになっていった。大村知事が全面的に津田大介を信頼していなければ成り立たない論理で、この企画展は始まった。

公共施設での企画展開催に固執したのは、大村知事が全ての総責任者であるというパブリックな催し物で、全権委任に等しい形で企画展を任せておきながら、「作品を取り替える、展示を

中止せよ」と言うのは、権力体制側の検閲に当たると声高に叫ぶための仕掛けなのである。市民の抗議に行政が折れるということも、事前の契約に違反しているのは行政だと主張する材料である。

嵌められた大村知事が単に馬鹿だったのか、側近が無知蒙昧だったのかは知らないが、結果として企画展実行委員会の津田大介の一人勝ちになったのは間違いない。

解放同盟会館などの民間施設を使わずに、何としても公共施設でパブリックな催し物の一部に食い込んで開催したかったのは、「検閲」の弾圧を受けたという実績を作りたかったからである。

この「表現の不自由展」に対しての賛成・反対の二者択一の議論だけが沸騰して、肝心の企画展実行委員会に全権委任のような契約をしていたという実体が表面化しないのも、これまた津田大介の思惑通りの流れであろう。

鈴木宗男議員の国会質問の重大さ

参議院議員の**鈴木宗男**氏が十月十八日に北方領土問題に関して行なった国会質問は、保守陣営が当たり前だと思っていたことが「政府の嘘」だったと明らかにした。

月刊日本に鈴木氏が発表したのは、その時の政府への質問と回答である。

質問一「北方領土」という名称はいつから使われているのか。

質問二「日本固有の領土」という言葉はいつから使われているのか。

質問三「四島一括返還」という表現はいつから使われているのか。

質問四「不法占拠」という表現はいつから使われているのか。



これに対する政府の回答は、

「北方領土」は昭和三十一年三月十日から。

「日本固有の領土」は昭和三十年十二月七日から。

「四島一括返還」は昭和五十年十一月二十日から。

「不法占拠」は昭和二十七年三月七日から。

というものだった。

つまり我が国は、明治・大正・昭和を通して、北方領土は「日本固有の領土」であり「四島一括返還」を求めていた訳ではなかったのである。これは重大な事だ。「日本政府は戦後一貫して」という言い回しは、歴史歪曲になるからである。

ソ連が「領土問題など存在しない」と言ったら、我が国は「四島一括返還」を求め、ソ連が崩壊してロシアとなってからは、一時この主張を取り下げていた。日本政府は北方領土に関して、戦後一貫した主張など実際には無かったのである。

無論、だからと言って北方領土に侵略し略奪し殺戮したソ連の罪は消えないし、不当に居座っていることを正当化する根拠にもならないことを、ロシア側は真面目に考えるべきである。

併せて我々日本人も、政府の中途半端なプロパガンダに乗せられて、韓国人のように世界に恥をさらすことのないように注意したいものである。



韓国の反日を諷める「反日種族主義」という書籍

今年七月、韓国で「反日種族主義」という衝撃的な題名の書籍が発行された。副題は「日韓危機の根源」とある。

著者のインタビューが月刊ビューポイントに掲載されているが、それによると韓国には閉鎖的で排他的な民族主義があり、日本に対してだけ敵対的だと言う。これは部族社会に通じるものらしい。だから韓国人が誤解している日本との関係を、正しい歴史的事実を列記してこの本には書いていくそうだ。

著者は李栄薫元ソウル大学教授など六人で、国内で賛否両論の議論沸騰し、一気に三万部を売り上げた。その後、法務大臣がこの本を罵倒したので、興味を持った国民が書店に走って、売り上げは十万部を越えるまでになった。

反日に凝り固まった連中からは嫌がらせを受けたが、マスコミもこの本を大きく取り上げ、「まず読んでみよう、読みもしないのに親日派の書いた本だと決めつけるな」と報道した。

特に、日韓が険悪になったきっかけ「徴用工問題」では、一九四四年九月の徴用令以降の八ヶ月間だけの問題であり、それ以前は募集と斡旋だったことを示し、現在使用されている教科書が歪曲した歴史を書いていることを明らかにした。

朝鮮や韓国の独立運動は日本から弾圧されたが、大量虐殺も無かったし戦渦に巻き込まれる



ことも無かった事実を示し、日本軍が半島を略奪、殺戮したという教科書の嘘を暴いた意味も大きいものがある。

日本製鉄の募集広告に応募した四人が「強制連行、強制労働」と訴えて大法院判決が出たのだが、彼らは「炭鉱より製鉄所の方が条件が良い」と思っただけで応募して採用されたものだが、その日本製鉄が数ヶ月後に「徴用工事業所」に指定されたからというだけの話である。軍属になっていた者も、今になって強制連行の被害者だと名乗っている。こんなデタラメを許しては、韓国には正義感存在しないと世界から見られてしまう：という憤りが著者たちには大きかったようだ。

韓国の国民の多くは事実など無関心で、現実的に日本政府が韓国に謝罪・賠償しないから日本が悪いのだとしか考えない者が圧倒的であり、少なくとも歴史的事実を知らない者が反日デモに参加している。著者たちにとって、これは恥ずかしいことだろう。

それにしても、現政権を「歴史歪曲」と批判する内容の本が、あの韓国で公然と出版出来るようになった意味は、我々日本人も率直に評価すべきであろう。

稿 寄 猪が東京にまで出現

「兵庫通信」代表 村上 学

十二月になって、東京都荒川区に猪が出たという話題になっている。「亥年の最後だから、干支の猪が挨拶回りしている」などと軽口を言う評論家もいるが、野生の猪が人口密集地に出てくるのには理由がある。

二十年くらい前まで、神戸市灘区の住宅街では、野生の猪が子連れで餌を貰いに来ていた。人から餌を貰えるようになると、猪は小さな尻尾を犬のように振ってなついてく



る。筆者もこの頃、猪はあんパンが大好物だというのでやりに行った記憶がある。野生の猪であつても、一度でも人の手から餌を貰えばなつき始めるのである。

神戸市ではその後、猪の餌付け禁止を条例化したので、現在では猪は人間を怖がらないが餌を貰おうとなつくようなことはしない。

今回の東京に現われた猪は何を表わしているのかと言うと、山の中で一度でも餌を与えられた経験があると、人を怖がらなくなり、人の食べ物を求め始めるのである。そして荒川に沿って町に出て来たという話なのだ。

熊が人里に降りてくる話とは別の問題として考えねばならない。熊は秋の豊作で餌を充分取れば冬に多くの小熊を出産し、その小熊が縄張りを求めて天敵が少なく餌がある人里へ来るというので、居坐る傾向が強くなる。猪の場合は、山から餌場へ直行してくる傾向があり、食べ終わると山に帰る。餌場が見つけれられないような猪のはぐれ者は、単独で寂しくぶらぶらと彷徨うことになる。

猪が山から一直線で餌場に走ってくる習性を

最後の安全保障 種子条例制定を急げ

昨年四月に「種子法」が廃止された。戦後、国民が飢えることが無いよう、優秀で優良な種子を開発・普及する目的で日本政府が制定したはずの「種子法」だが、アメリカからの圧力に屈した日本政府は、事もあるうに最後の安全保障である種子法を廃止したのである。

モンサントなどの巨大種子企業から流入するバイオ種子も問題だが、それ以上に我が国で独自に育て上げた種子、技術、人材が流出するこ

利用した畷は兵庫県では多く、根菜類の畑の斜面側にトタン板を並べ、所どころに隙間を開けて、その隙間に山側へ向けた竹槍を並べる方法である。筆者の友人の畑では、年に何頭かが竹槍に串刺しになっているので、村で捌いて肉を分けると言っていた。熊は恐ろしいが猪は恐れる必要は無い。

荒川でも猪を餌付けし、気を許した所をズドンとやって、香辛料をたっぷり入れた料理にしてやれば良いだけの話である。

とは、さらに大きな問題である。

国がアメリカに敗北しても地方は白旗を上げない…と言って、既に二十以上の県で「種子条例」が独自に制定され初めている。北海道、長野県、富山県、兵庫県などが特に敏感だったそうだが、農業県でない所は反応が鈍いそうである。

「種子安保」を地方議員も勉強し、全国の自治体で「種子条例」を独自制定して欲しいものである。

編集後記

令和の御代はどんな時代になるのか、後世どんな記憶を残すのか。我々は天皇に従うことが本来であるとの確信があるが、その陛下の求めておられることが詳かにはわからないという葛藤がある。だから、マスコミや政治家の言説に右往左往することになる。

「お上の望まれるように」という我々の心持ちがあれば、時折漏れ伝わる陛下のお気持ちを探ることが出来るかもしれない。秋篠宮様が大嘗祭を内廷会計で（質素に）行つべきと仰せであったのを如何に捉えるべきか。また皇位の男系継承を望むにも、己こそ正なりとの僭越があつてはならない。

令和の時代には、お上が望まれることが何であるのか、国民にも判りやすい形で示されることを希うばかりである。

本部・地方本部活動報告

■関東本部

◇十一月二日（土）

・午後五時より、東京上野・東天紅三階鳳凰の間に於いて「青年思想研究会・先憂を偲ぶ会」。内藤本部幹事長、山田関東本部副本部長が出席。

◇十一月二十二日（木）

・午後六時より、東京新宿・パトール東京に於

いて「阿形充規先生の傘寿を祝う会」。杉山副党首が出席。

■関西本部

◇十一月二十四日（日）

・正午より加古川志方町・玉乃緒地蔵尊にて、恒例の「三島由紀夫先生慰霊碑」慰霊清掃を挙行。今回は我ら地元兵庫の従来メンバーに加え、大日本赤誠会（笠原正敏会長）会員有志が全国から参集、旧交を温めた。参加者二十名で三島氏の詩「英霊の声」を奉唱し、碑前にてささやかな直会を催した。



◇十二月六日（金）

・午後六時より、尼崎市内において「むすびの集い」勉強会兼忘年会。有志八名が出席して今年を振り返った。資料は、世界戦略情報みち誌から「新深層潮流」シリーズ。